高尾山報 令和3年2月号 毎月1回発行 通巻第685号

高尾山報

令和3年2月号

七條を着け 新貫首 初護摩供

法の水茎 (104)

大正大学講師　髙橋秀城

年末年始にかけて、日本列島に強い寒気が流れ込み、とりわけ日本海側を中心として荒れ模様の天候が続きました。短時間で一気に増していく積雪に、不安を覚えた方も多くいらっしゃったのではないでしょうか。古くから正月の大雪は豊年の前触れとも言われますが、人為を超えた自然の力を痛感しました。雪深い地に、いち早く春が訪れますよう念じます。

平安時代の終わり頃に、降り積もった雪で仏様を作った僧侶がいました。大雪が降ったのでしょうか、大きさは一丈六尺（約四・八五メートル）もあったそうです。その雪仏の前で僧侶は祈りを捧げました。

それを聞いたある女性は、このような和歌を詠んで僧侶に贈りました。

いにしへの
鶴の林の
み雪かと
思ひ解くこそ
哀なりけれ

（この雪の仏像が、遙か昔のお釈迦様のお姿かと思い合わされて哀れなことです）

歌の中の「鶴の林」は「鶴林」を訓読したものです。もともと「鶴林」とは、お釈迦様が入滅（亡くなられること）なされた場所を指し、入滅の時に、その悲しみから娑羅双樹が白鶴のように白く変じて枯れたという故事に由来しています。お釈迦様の入滅は、旧暦二月十五日に当たることから「如月の仏の縁」とも言われ、また鶴林そのものが「お釈迦様の死」を意味するようにもなりました。

僧侶は、雪仏から「鶴林」を連想した女性の歌を受けて、雪仏が消えゆく姿から「薪尽く」という言葉を導き出しました。二人は雪仏にお釈迦様を重ね、その恩徳を恋しく慕い合ったのです。

「薪」と言えば、弘法大師空海（七七四～八三五）の『性霊集』に「爰に一の薪を伝ふる者有り」（ここに一人の教えを伝える者がいた）と記されているように、「薪」には「仏の教え」という意味も込められています。「谷の水、峰の薪の道」という言い回しもありますが、これは、「み雪」は、その名の通り美しい雪でもあり、雪仏でもあり、お釈迦様そのものでもあるのでしょう。そう気づいたとき、女性の心の中に懐かしい「ものの哀れ」の深い感動が湧き上がってきたのかもしれません。

しばらくしてから、僧侶は女性に歌を返しました。

日を添へて
雪の仏は
消えぬらん
それも薪の
尽きぬとや見し

（『康資王母集』）

（日が経つにつれて、雪の仏は消え失せるでしょう。それもお釈迦様の入滅と見えることです）

「薪の尽きぬ」（薪尽く）は、お釈迦様入滅の際に、梅檀や沈香などの香木を薪として火葬した話に基づいています。薪が燃えて無くなる様子から、やがて鶴林と同じように「お釈迦様の死」を表すようになりました。

年明けの高尾山でも雪化粧となりました

折り折りの記 (138)

薬王院の新貫首の頭冬日照る

波多野　重雄

例年、豆撒きは二月三日だが、今年は二月二日である。明治三〇年（一八九七）以来一二四年ぶりに二日となる。地球が太陽を一周する時間が三六五日、丁度ではない為のずれで、一二一～二四年は三日に戻るが、一二五年に再び二日になる。節分は二四節気の一つ「立春」の前日。

今般、大山猊下のご勇退は惜しみても余りあるものがある。猊下が歳末の夜遅く迄、書見の姿が行燈の揺らぎに垣間見し想い出が脳裏をよぎる。

今後のご健勝をお祈りす。

髙尾山の天然記念物の天を突く「蛸杉」の新幣束も春風に寿ぐ。

薬王院の豆撒きに佐藤新貫首の頭が冬空に映える。僧侶や八王子車人形の西川古柳座や、玉鷲関を始め地元芸妓衆、善男善女等で寺が揺れる程、豆を撒く景は誠に壮観である。

「コロナ退散」を祈る市民の姿は暮れても残る。

（髙尾山健康登山の会会長）

古稀寿

厚木市　荒井　一雄

人生七十古来稀
人生七十憂慮覚
実存哲学救済我
永劫回帰謙虚学

若き日の
願ひは年老ひてのちに
まさに豊かに満たされゆかん
（ゲーテ）

古稀の寿

杜甫曰く
『人生七十、古来稀なり』と…
人生七十、憂慮を覚ゆ…
『実存主義哲学』こそ
今の我を救ひ、
ニーチェの『永劫回帰』思想を
謙虚に学ばふではないか…

古稀の寿

杜甫曰く
『人生七十、古来稀なり』と…
人生七十、憂慮を覚ゆ…
『実存主義哲学』こそ
今の我を救ひ、
ニーチェの『永劫回帰』思想を
謙虚に学ばふではないか…

は行基菩薩（六六八～七四九）の歌に、

法華経を
我が得し事は
たき木こり
菜摘み水汲み
仕へてぞ得し

（『拾遺集』行基）

（『法華経』を学び得たのは、薪を集めたり菜を摘み取ったり水を汲んだりして仕えたからこそ得られたのだ）

と詠われているように、『法華経』「提婆達多品」に見える「採菓汲水」の教えに拠るものです。お釈迦様は過去世から、阿私仙人のもとで木の実を採り花を摘み、木を樵って水を汲むという仏道修行に励んできました。それは、難行苦行の「薪の道」とも呼ばれています。

では、お釈迦様が歩まれた「薪の道」（仏道修行）とは、いったいどのようなものだったのでしょう。例えば、次のような話を見ることができます。

財産は我が身のためであり、我が身は心が主である。財産が多くても、身を失えばどうにもならない。身が楽しくても、心が苦しかったならば何にもならない。ただ心を安らかにし、身が自由であれば、これこそが今生の喜びとなるのだ。身心ともに安らかなのを縁として、仏道修行を心掛けなければならない。貧乏を安らぎとして罪も少なく、心も安らかに身も落ち着いて仏道修行するのが、人の身として生まれた甲斐となるのだろう。

寒山子が言うには「千金の宝に満たされているより、僧侶として貧しくしているほうがよい」と。また古人が言うには「仏道を学ぼうとすれば貧を学ぶべきである」と。

世俗の賢人も首陽山に籠もって蕨だけを食べて飢え死にし、綿山で薪の火に焼かれて死んだ例もある。すぐれた仏道の道に入ろうとする人は、世俗の塵（煩悩）に心を染めて、無為寂滅の道から遠ざかってはならない。

（『沙石集』）

木尾の「無為寂滅」とは、仏道修行者が理想とする「涅槃」（悟り）の境地です。心身を悩ませる煩悩（塵）を払って、自然とともに生活する「薪の道」は、清らかで心豊かな「清貧の道」に通じているのでしょう。

冬ごもり
薪つむとも
山里は
雪よりやがて
花ぞ咲くべき

（藤原俊成『長秋詠藻』）

（冬籠もりで薪を積んだとしても、山里は雪解けとともに花が咲くでしょう）

薪をとってきた山人が、積んだ薪に花を添えることを「薪に花を折り添う」と言います。気高い優しさを心に秘めれば、雪のように冷え切っていた身体にも、お釈迦様のあたたかな光が差し込んでくるでしょう。

（栃木北部教区普濟寺）

より良き一年でありますように

新春に祈る　高尾山初詣

令和三年　辛丑（かのとうし）

佐藤御山主により御信徒の皆様の諸願成就がご祈念されました

令和三年辛丑（かのとうし）の新年を迎えた大本堂では、世界平和、国土安穏、疫病退散、東日本大震災早期復興、家内安全、身体健全、身上安全、心願成就、その他諸願成就を祈り、新春特別開帳大護摩供が厳修されました。

普段お正月の高尾山では、全国各地から大勢の御信徒の皆様が訪れ、賑わいを見せておりましたが、本年は新型コロナウイルスによる疫病流行の為、分散参拝の呼びかけを行ったことで、通常とは違う森閑（しんかん）とした趣（おもむき）を見せておりました。

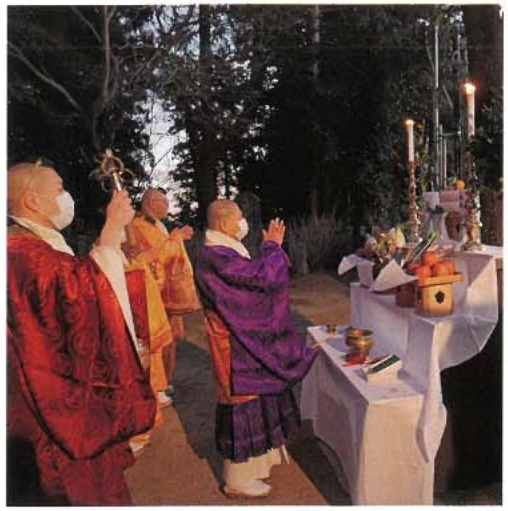
先般告知しておりましたように、薬王院においては感染症対策の為、大本堂においては入場に際し、通常定員の半数に抑える定員制限を行い、例年有喜閣で行っていた新年の挨拶（おとそ膳）を中止し、信徒休憩所の使用を中止、各所に消毒液を設置するなど様々な対策を実施致しました。

大晦日には京王電鉄及び高尾山ケーブルカーの終夜運転が中止となったことで、少なくない御信徒の皆様が夜の山道を徒歩で参詣されました。

新年最初となる一月一日の零時に行われた新春特別開帳大護摩供に参列され、昨年十二月に高尾山の新山主に就任された佐藤山主大導師のもと厳修されました。

例年ですと明け方には山頂に祈祷所を設けて、登山者と共に初日の出を祝う「迎光祭」が行われますが、本年は山頂への入場規制が執行されたため、境内地において実施されました。幸いなことに好天に恵まれて晴れ渡り、きれいな御来光を拝すことが出来ました。

一月八日から再び発出された、新型コロナウイルスに対する緊急事態宣言など、まだまだ不安定な状況が続く毎日ではありますが、本年がより良き一年でありますよう、お祈り申し上げます。



境内で行われた迎光祭では初日の出を祝う

山中逸晶さんによる奉納舞

本年で六十周年を迎えた武蔵野新正講の皆様

大本堂内では定員制限を行ったり、参拝の際には間隔を空けて頂きました

高尾山年代記 14

歴代山主の事跡をたどる

明治大学博物館　外山　徹

八世源實2―後北条氏滅亡

北条氏照の政庁が八王子城に移ったことがはっきりする天正一五年（一五八七）、豊臣秀吉は西国の平定を果たすことになる。次なる標的は、当然ながら関東・東北であった。

秀吉の天下統一

西日本には四国の長宗我部、中国の毛利、九州の島津といった錚々たる面々が割拠していたわけだが、何れも領地の割譲を受け入れて秀吉の軍門に下った。秀吉の戦略は恫喝的であったが、でき得る限り出血を避ける傾向にあり、諸大名には勝手な闘争を禁じた（惣無事令）。

北条氏は秀吉の圧力に対し、抗戦の備えをすべく小田原城をはじめ領内の諸城を修築しており、天正一五年の末には農民に至るまで戦闘要員の根こそぎ動員を行った。この時は秀吉との間に妥協が成立して開戦は回避されたが、当主氏直ないし父氏政の上洛・出仕が促されたものの即座には応ぜず、和戦両様の構えを崩さなかった。同一六年には八王子方面で寺院の鐘を回収することが命ぜられている。陣鐘というよりは、鋳潰して弾丸とする目的と理解されている。

薬王院文書の中にも、この臨戦体制に関わる生々しい痕跡が残っている。写真は天正一七年五月一〇日付で北条氏照が発給した印判状である。

富士関役所構えの道具尺木以下、高尾山においてこれを取るべし。但し、別当手代を出し、これを切らさすべき旨、仰せ出さるものなり。よって件の如し。

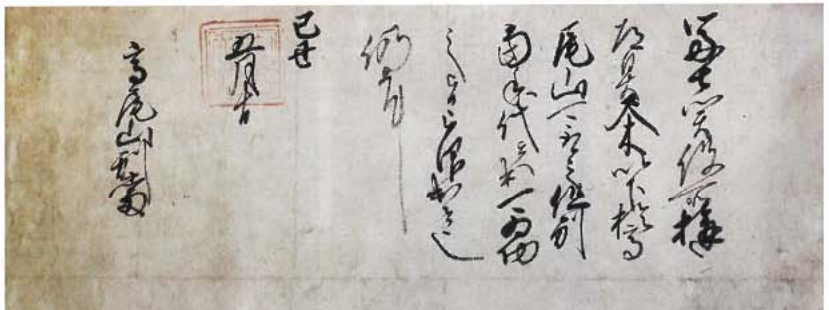
己丑

印　五月十日

高尾山別当

「富士関役所」とは高尾山の北の尾根続きにある小仏峠上に設置された関所のことである。それまで高尾山内の山林伐採を禁じてきた氏照が、ここでは用材を切り出すよう命じている。「尺木以下」とは木材のサイズの意味ではなく、「構えの道具」とあるので防御に用いる「逆茂木その他」の意味になる。逆茂木は尖らせた枝を外側に向けて立て並べるバリケードである。高尾山別当に対し手代を立ち会わせるよう求めているのは、山の木をみだりに伐採させないようにという配慮だろう。小仏峠は甲斐（山梨県）方面から関東平野への進入路として軍事上の要地であり、小山田信茂の侵入によって廿里の合戦が生起したことは、以前に述べた通りである。

北条氏は領国の周辺勢力との係争を抱えており、相手は豊臣方と通じていることから、状況はきわめて危うい均衡状態だった。案の定、その年の暮れ、上野国（群馬県）において北条方の猪俣邦憲と真田昌幸との間で戦闘が発生して事態は動く。北条氏と真田氏による沼田城を巡る争いは、北条方への譲歩に決していたが、真田方に残った支城に対し攻撃をかけたというものだった。私闘を禁ずる和睦条件に反したとする猪俣の処罰要求を受入れず、また、要望されていた氏直・氏政上洛の機会も失することになった。



小仏関の築城資材を切り出すよう命ずる北条氏照の印判状（写真提供：八王子市郷土資料館）

高尾山の立場

その時、高尾山別当は八世源實であった。明けて一八年二月二二日付で、後の高尾山九世となる源恵に対し伝法の儀式をおこなっている。北条領では秀吉来攻近しの雰囲気が高まり、迫りくる戦乱を見通しての伝法だったのではあるまいか。

二月、秀吉は北条氏の叛意疑いなしと討伐の軍を催した。先陣の徳川家康勢三万、蒲生氏郷、細川忠興、浅野長吉、石田三成、宇喜多秀家らの諸将による本隊は一四万、秀吉直轄の兵力三万の大軍が駿河国（静岡県）沼津周辺に集結した。別に北方からは上杉景勝、前田利家、真田昌幸らの三万五千が進発した。三月二九日に山中城（静岡県三島市）攻撃にかかり、その日の内に落城させると、箱根路を進み、早川をはさんで小田原と対峙する石垣山に着陣した。

この秀吉の関東進攻にあたっては、各地に乱暴狼藉を禁ずる制札が発給されていることがよく知られている。多摩地域でも四月に補陀郷（＝布田郷・調布市）、関戸郷（多摩市）、三澤村（日野市）に、寺院も高尾山に程近い上椚田村高乗寺が発給を受けている。しかし、高尾山薬師堂は北条氏の祈祷所という立場にあった。時代はかなり下るが『武蔵名勝図会』（文政三年・一八二〇）の記事によると、この時、西多摩にある北条氏ゆかりの六ヶ寺の住僧は、敵降伏の祈祷を行うため八王子城に入ったという。源實の姿もその中にあったというわけだが、そうすると、俄然、二月に源恵に授けられた印信（秘法伝授の証書）の一文字一文字が重みを増してくる。

八王子城落城

上杉・前田らの北国勢は、四月二〇日に松井田城（群馬県安中市）を攻略。続く鉢形城（埼玉県寄居町）には一ヶ月近くを要するが、六月一四日に開城。二二日には木村重茲らが増強された兵力五万が八王子城周辺に布陣した。城は氏照配下の重臣、横地吉信、中山家範、狩野一庵、近藤綱秀、大石照基らが守備を固めたが、城主氏照自身は本拠小田原城に詰めて不在であった。

前田・上杉らは、鉢形城で守将北条氏邦を投降させていたが、八王子城については強攻を選択した。これには城主氏照が主戦派であったことが関係しているかもしれない。六月二三日の早朝、大手の口から前田勢、搦め手から上杉勢が攻め寄せた。城将の奮戦の様子、攻め手の少なからぬ損害が後世に伝えられるものの、難攻不落を誇った大城郭はわずか一日の戦闘で陥落してしまった。落城の際には、城の女性らが御主殿淵に身を投げた悲話が伝わる。

さて、『武蔵名勝図会』の記事によると、北条氏の祈祷寺院は本丸で百座の護摩修法の最中であったが、火の手が及ぶと掲げていた両界曼荼羅を抱えて煙の中を逃れたという。その際、曼荼羅を取り違えたことが、後世、表装の修復によって判明したという逸話も残り混乱ぶりを伝える。また、敵の攻撃が始まった際、脱出を指示されたようで、道中の用心のため薙刀を賜った僧侶もあったという。その場に留まり火炎に身を投じて北条氏に殉じた僧侶もあったという。源實はと言えば、江戸後期の記録ながら慶長五年（一六〇〇）の隠居年があるので、この時は虎口を脱することが出来たようだ。

かつて長尾景虎が侵攻した際には、各地の支城が籠城戦術を貫いたが、この度は、忍城（埼玉県行田市）を除いて全てが落城した。北条氏は進退窮まり、月が明けた七月五日、豊臣方の総攻撃を前に小田原城は開城。一二日、氏照は兄氏政とともに責を負い切腹して果てた。北条氏康が祈祷を依頼し寺領を寄進した永禄三年（一五六〇）以来三〇年を経て、高尾山はここに最大の檀越にして庇護者を失うことになってしまったのだった。

天正一八年八月一日、新たに徳川家康が関東に入った。

《参考文献》萩原龍夫・杉山博編『新編武州古文書』上下（角川書店、一九七五・一九七八）、下山治久『八王子城主・北條氏照』（たましん地域文化財団、一九九四）、『新八王子市史』通史編２中世（二〇一六）、黒田基樹『戦国北条五代』（星海社新書、二〇一九）

おことわり　本連載では史料の引用について、読みやすく原文に手を加えています。

いけばなの心⑫

華道教授　佐藤　宗明

立春を過ぎ暦の上では春となりましたが、まだまだ寒い時期が続いています。

そして、未だに世間では暗い気持ちになることも多いかと思います。

そこで自然に眼を向けることで、春の兆しを感じて気持ちを切り替えてみてはいかがでしょうか。道端に眼を向けると、草木の蕾が目立つようになって来ています。

今回の作品は木瓜を使った生花正風体です。ボケはバラ科の植物で赤や白の美しい花を咲かせます。枝ぶりは角張った感じで枝先は鋭いとげがあり、バラの仲間だという事が感じられます。

基本的に春の花ですが、品種によっては秋頃から出回ってきます。そのため、花材の種類が少なくなりがちな冬にあって春を感じさせる花材として、よく使われます。

ボケは鋭く曲がり、自由に動く枝が特徴です。今回の作品も鋭く直線的に枝を伸ばし、陰方（左奥）に大きく枝をなびかせる事でボケの特徴を生かしてみました。

ちなみに、ボケは『木瓜』と書くように秋には瓜の形をした実がなります。生薬としても活用される他、果実酒やジャムなどに加工して食用にできるそうです。機会があれば一度食べてみたいものです。

花材：木瓜

高尾山の昆虫

ムラサキツバメ

136

ライオンの鬣、カブトムシやクワガタの長大で立派な角や大アゴ等、生物界においてはオスの形状や色彩が、メスに比べ秀逸とされることが少なくありません。

今回取り上げますムラサキツバメ（紫燕）のオスは、翅の周囲は黒褐色で、表面のほとんどがやや暗めの紫色という色彩で、渋い美しさがあります。

一方メスの方は黒褐色の縁取りこそは幅広いものの、輝きの強い青藍色を帯びて一際目立ちます。

名前も姿もよく似た同じシジミチョウ科のムラサキシジミ（紫小灰蝶）と混同されることが多いですが、本種の方がより大型で翅の末端に左右一対の尾状突起があることで見分けられます。

本来は南方系の蝶で以前は高尾では見られない種でしたが、温暖化で北上して東日本まで分布を拡げました。

ツバメの和名の由来は、後翅にある尾状突起をツバメに見立てて付けられたようです。

何故かメスが地味な種が多い中で、本種は人類同様に、女性美を強くアピールしているように感じます。

（文　松島　孝　撮影　上村　雅昭）

明日が来るのが嬉しくて

八王子市　澤田　守正

日本の小説家で黒井千次という方がいる。

当時の富士重工業（現在・株式会社SUBARU）に勤めている傍ら創作を行い、途中退社後、作家活動に専念した。

平成二十六年に執筆された【老いの味わい（中央公論社）】の中に

夜も遅くなり、そろそろ寝ようかと思う頃、一日を振り返って、今日は何もしなかったな、と後味の悪い気分を噛みしめることがある。

この本の著者は、昭和七年の生まれとのことで、現在八十八歳になられている方であるが、読んでみて『なるほど』と共感する事が多くあった。

「今日は何もしなかった」、「無為に過ごした」という筆者のどうしようもない寂寞感と、自分に対する苛立しさは、まさに共感をするものがある。

振り返れば、若い頃は仕事、家庭、遊び、すべてのものが充実していた様に思われる。

仕事もした、酒も呑んだ、歌も歌った、紅灯の巷を徘徊もした。

追われるものは無く、常に何かを追い求めていた。明日が来るのが嬉しい時代であった。

追い求めることの中に、自分では気づかない充実感を持って生きていた。

それが、ふと気づくと、いつの間にか追われる立場になっていた。

年齢を重ねるということは、「何もしなくなった」のではなく、出来なくなっているのである。

追い求めるものが無くなって来ている、ということである。

年寄りは「余命」という不可思議で、得体の知れない二字に追っかけられて、呻吟しているのだ。

しかし、今を生きる術として、この二字に追っかけられていることに気づかないふりをして、毎日を生きる事が一番楽で、それが楽しい生き方だと決め込んでいる。

ただ、苛立ちや寂寞感はあるが、これを持続して心に持ち続けたとしても、決して明るい明日の朝を迎える事は出来ないであろう事は、理性では解ってはいる。

著者も、この本の中で言っているように

人は生きている限り、増し続ける自分の人生から、自由になることは出来ない

ものであり、また

年齢とは逆行を許されぬ、流動的なものである

という現実があるのである。

そして、今ひとつ著者の言葉、

考えてみれば、年齢というものは、常に初体験なのである。現在とは、その先に延びていく時間なのであり、これは常に新しい体験を孕んでいる。

だから、『今日が一番若い』、ということであるが、『初体験』とは恐れ入った言葉である。

実に「初体験」には、初々しさと輝きと感激があるのである。

生きている限りは、明日に出会うであろう初体験に向かって、明るく、少しの希望を持って歩みを進めたいものである。

それなりの年齢となっても、

『明日が来るのが嬉しくて』

という、何かに出会うことが出来たならば、これ程幸せなことは無いと思うのである。

合　掌

大山前貫首の揮毫

観音菩薩の宗教 ㊳

国際教養大学特任教授　金岡秀郎

観音菩薩の転生者としての聖徳太子（その1）

歴史上の人物、ことに偉大な宗教家が如来や菩薩の生まれ変わりとされる信仰は世界各地に見られる。その代表的な例はすでにたびたび見てきたように、仏教文化圏ではチベットのダライ・ラマを筆頭とする化身ラマ（spruls ku）の思想であり制度である。化身ラマとは、今生のみの一回生ではなく、何度も生まれ変わって衆生済度をする僧侶をいう。その思想には、以下のような背景・根拠があろう。

第一は、仏の身体とは何かを考察する仏身論からその根拠が見出せる。インドで生まれ仏教を起こしたゴータマ・ブッダは、クシナガラの地で齢八十にして涅槃に入った。悲嘆に暮れる残された人々は、ブッダの入涅槃とは肉体の死に過ぎず、ブッダの教えは「法身（dharma kāya）」として不滅であると考えるようになった。仏法そのものである法身は凡夫には見聞できない。それをこの世の衆生に伝えるために現れたのがインドのブッダであった。その肉体を「生身（rūpa kāya）」または「応身（nirmāṇa kāya）」と呼ぶ。法身はブッダが出現しようがしまいが不変の真実であるが、ブッダの他にも時宜に応じて法身をこの世に示す生身は現れ得る。その一つが化身ラマである。

第二は、輪廻転生の思想・信仰である。輪廻はサンスクリット語サンサーラ（saṃsāra）の漢訳で、過ぎゆくこと、繰り返すことなどから、生まれ変わることを表す。サンサーラは「歩き回る、徘徊する」を意味する動詞サンスリ（saṃ-sṛ-）の派生語である。輪廻は仏教以前からインドに深く根ざした思想であったが、ブッダが説いた無我・無常とは本来、相容れないものであった。無我であれば、転生する主体としての我はないからである。この世に生まれた我は仮の姿であり、諸行無常の理どおり滅してしまえば、次に続く我はない。それが無我の思想である。また、諸行無常であれば同じ個我が新たな個体に宿って続いていくことはありえず、ブッダの思想から大いに逸脱してしまう。しかし輪廻思想は仏教徒の信念や経典の所説に溶け込み、論理的矛盾を孕みながらも共存していった。ブッダの三法印を究極的な真実である勝義諦とすれば、輪廻思想は人々の心や社会における真実である世俗諦であるともいえる。輪廻思想によれば、自分が死んだ後も生前の業に応じ、その自分が地獄などの六道に赴き、生死を繰り返す。化身ラマも、ひとたび生命を終えても新たな肉体に宿って、この世に再臨する。これを転生という。

それではなぜ、化身ラマは転生を繰り返すのか。それが第三の根拠であり、衆生済度を旨とする仏教にとっては最も重要な思想であり実践である慈悲である。慈悲は自己への執着をなくす空の思想や、自他不二などの哲学に支えられ、他者に楽しみを与える与楽、悲しみを軽減する抜苦などの実践によって実現される。転生ラマのような慈悲深き僧たちは、今生の衆生済度では飽き足りず、来世もまたこの世に残って人々を苦から救済すると信ぜられ、尊崇されてきた。なかでもダライ・ラマは慈悲の尊格である観音菩薩の転生者とされた。そのため、ダライ・ラマ五世によって建立されたダライの住居にして政庁である建物は、ポタラ宮（Pho brang Po ta la）と名付けられた。ポタラとは、観音の浄土を指す南方の山であるサンスクリット語のポータラカ（Potalaka）に由来する（拙稿「観音菩薩の宗教⑫」）。観音菩薩は大乗仏教を代表する菩薩であり、その慈悲がダライ・ラマ尊崇の根本にあることは、チベット民衆の畏敬するダライ・ラマの利他行から明らかである。

観音菩薩の転生はダライ・ラマで世界的に知られることとなったが、それはチベットのみで興った思想・現象ではない。化身ラマの歴史や制度とはまったく異なるものの、日本でも観音菩薩の生まれ変わりに関する伝説と信仰があった。そのもっ

とも早い例は聖徳太子である。聖徳太子に関してはその実在・非実在説が学会でも世間でも話題となったが、それについてはすでに触れた（拙稿「観音菩薩の宗教⑬」）。ここでは思想史的事実としての聖徳太子観音転生説について見ることにする。聖徳太子の事跡は、『日本書紀』や『上宮聖徳法王帝説』がまとまった記事を伝える古い文献である。しかし『日本書紀』などでは、太子の成人後の摂政としての事跡の詳しい記述に比し、前生については触れられていない。誕生に関してもただ「皇后、懐妊開胎さむとする日に、禁中を巡行りまして諸司を監察たまふ（皇后は懐妊し出産なさろうとする日に宮中をめぐられ、多くの役所をごらんになった）」（推古記元年四月条）と簡潔に述べられるだけである。

前生における観音菩薩との関係は、平安期に成立したとされる『上宮聖徳太子伝補闕記』にいたり登場する。それを踏まえてさらに詳述されるのが、『聖徳太子傳暦』である。『聖徳太子傳暦』の伝承は、後に人口に膾炙して聖徳太子の人物像を形成した。同書には、聖徳太子の母・間人穴太部皇女の夢に救世の菩薩が母胎に入り聖徳太子を懐妊する場面が描かれている。間人穴太部皇女は『日本書紀』にいう穴穂部間人皇女で、欽明天皇の第三皇女にして用明天皇の后である。本稿では、より詳しく書かれている『聖徳太子傳暦』からそのエピソードを見ることにする。原文は漢文であるが、諸家の研究を参照して以下に書き下し文を示す。

「三十一年辛卯春正月朔、甲子の夜、妃夢らく。金色の僧の容儀太だ艶きいまして、妃に対ひて立ちて、これに謂ひて曰く、『吾に救世の願あり。願はくは暫く后が腹に宿らん』と。妃、問ふ。『是、誰とかする』と。僧の曰く、『吾は救世の菩薩なり。家は西方にあり』と。妃の曰く、『妾が腹は垢穢なり。何ぞ貴人を宿さん』と。僧の曰く、『吾は垢穢を厭はず。唯、望むらくは尠しき人間に感ぜんことを』と。妃の曰く、『敢て辞譲せじ。左之右之も命に隨はん』と。僧、歓びの色を懐きて躍りて口内に入りぬ。妃すなはち驚き寤めて、喉の中、なほ物を呑めるに似たり。妃の意、大いに奇として皇子に謂る。『儞の誕せる所、必ずや聖人を得ん』と。これより以後、始めて娠めることありと知る」

現代語に訳せば以下のようになろう。

欽明天皇の三十一（西暦五七一）年、間人皇女の夢に立派な姿の金色の僧侶が出てきて言った。「世の衆生を救うため、あなたの腹の中でしばらく留まっていたい」。妃が「あなたはどなたですか」と問うと、僧は「私は救世の菩薩です。家は西方にあります」と答えた。妃が「私の腹は汚いから、貴い人が入るものではありません」というと、僧は「私は汚いのは厭わない。それよりも少しのあいだ人間として生まれたい」。それ対し妃が「それなら辞退しませんので、言いつけに従います」というと、僧は喜んで妃の口の中に入った。妃が目覚めると、まだ何かを呑んだ感覚があった。妃は思いを（後の聖徳太子である）皇子に告げた。「あなたが生まれたら必ず聖人となるでしょう」。これ以後、妃は妊娠したことを知った。

『聖徳太子傳暦』の皇后が懐妊する記述
（国立国会図書館蔵本、出版年不詳、Kindle写真版より）

上記の「救世の菩薩」が救世観音であることはまちがいない。原文の「尠しき人間に感ず（尠感人間）」の「感」は、感覚として心や身体に感ずるの意味ではない。ここでは業報すなわち前世の行為の報いとして現れることを「感」と表現している。つまり、世を救いたい願を持つ慈悲の僧が、その報いとして尊き人間に生まれることを意味する。しかも人寿は有限であるから、「尠しき」と形容したのである。

■健康登山者投稿作品■

季節の写真「シモバシラ」

八王子市　高岡輝幸　様

高尾山　季節散歩

暦の言葉
「七十二候」
土脉潤起
「つちのしょううるおいおこる」
二月十九日～二月二十二日頃

「土脉」とは大地を指しております。つまり、冬の冷たい雪に代わって春の暖かな雨が降ることで、寒さに固くなっていた大地が潤い、もう少しで春の植物が芽吹く季節がやって来る様子を、意味しております。

今月の風物詩
春一番（はるいちばん）

立春後に初めて吹く、南向きの強い風のことです。この風が吹いた日は春のような陽気になりますが、翌日には寒さが戻ることが多いため、そういう日は「寒の戻り」と言われております。

春一番は必ず吹くとは限らず、観測されない年もあります。

一歩一歩煩悩滅除

百八の階段を昇り、悩みや煩い事を取り除きましょう

九十七段　誰でも持ってる光る石

原石も一生懸命に磨かなければ、いつまでたっても輝く宝石にはなれません。誰でも自分の中に得意なこと、自信があることなど光る石を持っているはずです。良き先達や友人と出会い、その光をより輝くように育てていきましょう。

◎健康登山の皆様へ
高尾山報投稿の御案内

御護摩受付所では、皆さまの『健康』に関する思いや思い出・習慣、又は『健康登山』を通じて経験した出来事などの心温まるお話を聞かせて頂いています。

そこで、皆様のお話を多くの方々にお届けできますように、御護摩受付所に「投稿箱」を設置致しまして、皆様から投稿頂いたお話や作品を、『高尾山報』に掲載させて頂いております。

その他、おもしろい体験・変わった出来事・ポエム・俳句等どんなお話でも結構です。是非お聞かせください。御協力宜しくお願い致します。

※　**投稿頂きました作品は全て掲載できるよう努めますが、当山の判断で掲載しない場合もあります。また、多くの方に投稿頂きました場合、掲載までお時間を頂く場合がございますことを御了承下さい。**

『高尾山健康登山の証』のお勧め

年間約二百八十万人の人々が訪れ、「世界一登山者の多い山」として知られている高尾山。

登山者の皆様の励みになれば、との思いから平成十一年から健康登山を始め、いまでは約五万人の方々が会員となられております。

期限はございませんので、御自分のペースでお楽しみください。

また、一冊に付き二十一回スタンプを押すページがあり、終了したことを満行と言います。満行されますとお祝い膳として、精進料理の御接待や、健康登山者限定の記念品などと交換もできます。

帳面……七百円
スタンプ…百円

奉納御礼

大本堂に新たな護摩釜を御奉納頂く

昨年の十二月二十一日、新たに大本堂において御護摩修行の際に護摩木を焚く火炉である「護摩釜」を、東村山市にお住いの福島光子様より御奉納頂きました。

当日は高尾山の御縁日に当たり、九時より行われた神徳報謝百味飲食供において、佐藤山主御導師のもと初めて祈祷されました。

それまで使用されていた釜は、字がかすれているために判読が難しいのですが、明治二十一年か三十一年に御奉納頂いたもので、現在の大本堂の落成（明治三十四年）以前から御護摩の火を灯し続けておりました。

福島様にお話を伺いますと、長年高尾山への信仰を続けてきており、令和二年に山主が交代されたことを記念して奉納されたとのことです。

この護摩釜は今後も永年に渡り、御信徒皆様の願いを届ける炎を灯し続ける事でしょう。

設置された護摩釜を確認する福島様

これまで使用されてきた護摩釜

院内散歩 48
～薬王院の展示物～

チェンソーアート　「丑」　作・城所ケイジ

初甲子大黒天祭（一月十六日）

クコの木御奉納者御芳名

八王子市　佐宗　愛子
〃　佐宗　千明
日野市　武田　弘信
（順不同・敬称略）

高尾小物語 34

飯縄権現遙拝社

絵・橋本豊治

若葉まつり御来山者安全祈願祭

高尾山では、毎年四、五月の土日に様々なイベントが開催される「高尾山若葉まつり」に際して飯縄権現遙拝社にて、高尾山に登山するお客様の無事を祈願する、来山者安全祈願祭が行われます。

山麓不動院の正面には、デパートの伊勢丹より奉納頂きました、「飯縄権現遙拝社」が建立されております。

高尾山と伊勢丹との御縁は、昭和四十八年、伊勢丹八王子店の屋上に、高尾山の御本尊、飯縄大権現様が勧請されて分霊院が建立されて以来となります。昭和五十四年になると伊勢丹立川店の発展を願い、御本尊は高尾山立川伊勢丹分霊院として、立川店屋上に遷座されました。

その後、より多くの方々にお参りして頂き、山上の飯縄権現堂を麓より遙拝して頂くため、平成十五年四月六日に、御本尊様を遷座して遙拝社を建立し、若葉まつり御来山者安全祈願祭と共に飯縄権現遙拝社の開眼法要が行われました。

決心まげず
貫き通し
強い心で
挫けずに

いろは天狗落し文 ①

い　言うだけならば誰でも出来る　自ら動くようにする

「口達者の仕事下手」という表現があります。口では立派なことを言うが、いざ行動に移す時には何もしない、できない人ということです。

会社などの組織で何かを成し遂げたいのであれば、もちろん周囲の人と良く相談して協力することが大切です。

ただ、実際に行動する時には自分から音頭を取って動いてみましょう、そうすれば物事が動き始めます。そういう行動を続けてゆくと人が付いてきて、やがて信用が生まれてくるものです。

おはなし散歩道

源作じいと仙太

湯沢町　富樫あい子

ある山奥の小屋で木彫りをしている爺がいた。

春まだ遠いある夜の事、源作じいは、いろりに火を燃やし、木彫りをしていた。そこにタヌキ顔をした仙吉が入って来た。

「今夜は冷えるぜ。ちょっと火に当たらせてくれ」

「いいとも、さあ当たれ」

源作じいは、手を止める事無く、いつもの口調で火に当たらせた。

（仙吉め！　一杯飲みたくて来たな）と心の中で思っていた。すると、

「じい、お前さんが今思っている事、当てようか」

笑いながら言うと源作じいが手を止め「ふん！」といいニコッとした。

仙吉は、この山に住むタヌキだ。妻も子どもも猟師に撃たれ独り身の老いぼれである。源作じいとの出会いは数年前、霜が降りた寒い晩、この小屋に若者に化けた仙吉が山道に迷い一晩泊めてくれという事だった。

源作じいも、妻を早くに亡くし一人息子と暮らしていたが、その年息子を病で亡くして寂しい日々を過ごしていた。

そこへ、道に迷って来た若者の姿が、あまりにも息子と重なり心よく泊めた。その晩、二人は酒を酌み交わし若者に息子の思い出ばなしをした事が出会いだった。しかし酔っ払い眠ってしまった仙吉は、すっかり気を許してしまい日覚めると太い尻尾を出していた。

源作じいはとっさに、タヌキだったか！

こやつは（わしを取って食おうと、やって来たのだな！）と思い側にあるナタを引き寄せた。（ナタでやっつけてやる）と思っていた。タヌキは黒く縁どった目を光らせ、

「すまない。昨晩の寒さは老いぼれには身に染みて」と詫びた。ところで、

「じいさまが今思っていることを当てようか」と言った。タヌキのやつは

「『わしを取って食おうと、やって来たのだ。ナタでやっつけてやる』と思っている」ズバリ言い当てた。源作じいは驚き

（気持ち悪いタヌキめ！）

「おれは確かにタヌキだ。妻や子どもを撃ち殺されてから人間が心の中で思っていることを悟るようになった。タヌキもいたずらをする～　だが～」

タヌキは自分の思いをたんたんと話した。源作じいは、このタヌキが気に入った。それで、

「息子は男前だった。今度来るときはこの様に！化けて来い。そしてお前を仙太と呼ぼう」

仏壇の前の息子仙太郎の遺影を指さした。

仙太は、月に一度は息子の姿に化けて源作じいと夜話を重ねていた。

源作じいは息子と会えた気がして嬉しかった。

「仙太、わしは何も考えまい、思うまい。だが、やっぱり何かが心に浮かぶ。悟りは難しいのぉ」

源作じいは、いろりの側で木を削っていた。その時、削っていた木くずが仙太の額にパチっと当たった。不意を突かれて仙太は飛び上がった。

（人間という者は怖い。悟りきれないこともある）と思い山に帰って行った。

数日後、遠い町の寺に節分の豆まきに出かけた。美青年に化けた仙太に、

「いや～　倅みたいだ」

源作じいは喜び勇んで歩いた。寺の門前に着くと達筆で書かれてある。

（生火金　分別水）

ふたりは頭をひねり色々考えて出た答えは、

「火のように激しく生き、死ぬときは未練なく」という教えだと感動しつつ出て来た和尚さんに、「どんな意味でしょうか」と聞いたところ答えは、

「ゴミ出しの曜日です」

あぁ～こんなに上手な文字で意味ありげに書かないで欲しい。

二人は、悟りは難しい。

「凡人がいい」と笑いながら山奥に帰って行った。

新型コロナウィルス感染症終息祈願
高尾山火渡り祭 開催のお知らせ

3月14日(日)午後1時より　於・山麓祈祷殿大広場

火渡り祭「なで木」の功徳

「なで木」とは御本尊様の大慈大悲の御手であります。

年齢・氏名を御記入の上、健康な方は益々壮健であるように、お身体に病の生じている方は、御本尊様を念じながら「なで木」でその患部を撫でさすり下さい。

高尾山火渡り祭において、柴燈大護摩供の護摩木として山伏により、火中に供されることで、身体健全・息災延命を祈念して御本尊様よりお加持を賜り、病魔を滅する御加護をいただきます。

なで木料　一座二百円

郵送御護摩申し込み受付について

高尾山では大本堂に於いて、毎日御護摩修行を行っております。遠方の御信徒や、参拝できない御信徒の皆様の為に、御護摩札の郵送をお受けしております。

手紙、FAX等での申し込みをお願いしておりますが、「高尾山薬王院公式ホームページ」内の御護摩祈祷の御案内からインターネットにて、直接お申し込み頂くことが出来ますので、是非ご利用頂きますようお願い申し上げます。

お問い合わせ先☎〇四二・六六一・一一一五
FAX〇四二・六六四・一一九九
「郵送御護摩係」まで

高尾山火渡り祭
柴燈大護摩供御壇木特別志納御案内

（三月十四日　日曜日）

當山では毎年三月第二日曜日に高尾山祈祷殿大広場にて、高尾山に春を招く恒例行事として、高尾山修験道による火渡り祭が、高尾山麓火渡り本尊ご寶前において盛大に執り行われます。

火渡り祭とは、高尾山主大導師のもと、全国各地の霊山で修行を重ねた山伏が、一心に諸願成就の祈りを捧げる、関東屈指の大祈祷法要であります。

この勝行にあたり、御信徒の皆様方より柴燈大護摩供にて使用される、御本尊・飯縄大権現様の功徳を顕す御壇木のご志納を一本一万円にて募っております。

ご信徒の皆様、並びにご講中の講員様方におかれましては、高尾山の浄行に大いなるご信授を賜りますよう、謹んで御壇木のご志納をお願いを申し上げる次第でございます。

尚、ご志納の証として、ご芳名を薬王院境内に一年間掲示させて戴きます。御志納方法についての詳細は、高尾山薬王院信徒課までお問い合わせ下さい。

電話　〇四二・六六一・一一一五
FAX　〇四二・六六四・一一九九
大本山　高尾山　薬王院　信徒課

祈大願成就　身体健全

高尾　登

※今後、新型コロナウイルス感染症の流行状況等により、火渡り祭の実施方法を、急遽変更とする場合がありますことを、御承知おき下さいますよう、お願い申し上げます。

お知らせ

高尾山では、御壇木御志納の申し込みを、お電話・ファックス等で受付けております。

高尾山報の二月号に同封いたしました、郵便振替「払込取扱票」を利用してもお申し込み頂けますよう便宜を図りましたので、よろしくお願い申し上げます。

「払込取扱票」でお申し込みを頂く際に、願意（お願い事）が未記入の場合にご連絡がつかない場合、「身体健全」とさせて頂きます。

また、火渡り祭の時にお名前を読み上げますので、フリガナの記入もお願い致します。

尚、「払込取扱票」は、高尾山報助成金の振替にもご利用いただけます。

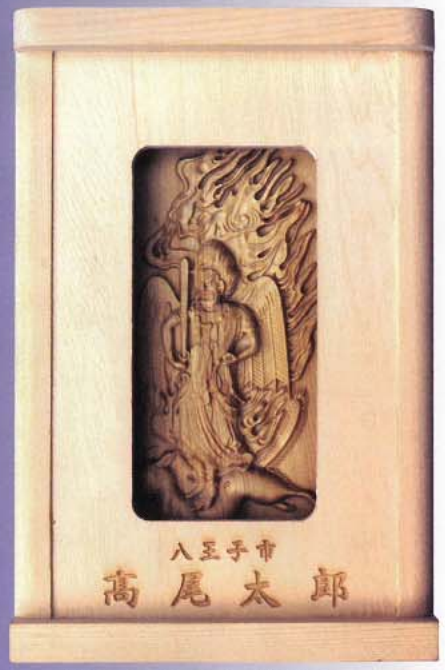
御本尊・飯縄大権現様との御縁を深める
大本堂内 結縁「内陣御納佛」奉安のご案内

高尾山では、御信徒様と高尾山御本尊・飯縄大権現様との益々の御縁が結ばれますように、大本堂内陣に御本尊様の御魂を宿した「内陣御納佛」の奉安を皆様にお勧め申し上げています。

お申し込みになりますと、御納佛との尊い結縁のしるしとしてご芳名を刻み、大本堂内陣壁面に奉安され、幾久しくご繁栄を祈念するものであります。

また、御納佛が壁面に満たされますと、その都度、内陣格子奥に移し大切に安置されるものであります。

御納佛冥加料　一体　五萬円



高さ13.5センチ　横幅9センチ

神徳報謝百味飲食供 御志納のおすすめ

当山では、御本尊飯縄大権現様の日々の御加護に感謝するために、御縁日である二十一日に、沢山のお供物を捧げて、大般若経六百巻を転読し、供養申し上げる法要を執り行っております。

皆様の御志納を受け付けておりますので、ご希望の方は問い合わせ下さい。

尚、法要終了後に大本堂にて百味の御札を授与致します。

また、当日参加できない方にはお札の郵送も受け付けております。

毎月二十一日　午前九時（於大本堂）
御志納金　一口　三千円以上

大般若経を守護する十六善神の図

高尾山報助成金志納者御芳名（順不同・敬称略）

東村山市　池ケ谷　益生
国分寺市　田中　佐那
羽生市　根岸　聡子
熊谷市　柿沼　博
相模原市　定本　京子
西東京市　宮野入しづ子
横浜市　押村　久男
日野市　太田　雄二
熊谷市　御正第三機械化組合
長井市　梅津　久幸
八王子市　田中　邦弘
〃　角田　光一郎
足利市　清水　松代
入間市　垣沼　ひとみ
鴻巣市　森田　健一
小平市　山田　裕二
古河市　横内　忠雄
板橋区　鎌田　真弓
比企郡　柿沼　慶子
府中市　菊池　健
墨田区　根岸　欣司
武蔵野市　後藤　明夫
高崎市　安中　モト子
中野区　河野　雅子
北本市　清水　武
八王子市　徳丸　広美
我孫子市　大島　まさ子
所沢市　金子　利夫
台東区　川俣　良実
所沢市　神元　誠
越谷市　五戸　順子
高崎市　落田　次雄
さいたま市　大澤　英子
千代田区　合同会社DOHOP
町田市　小平　末喜
港区　志田　隆猛
羽生市　藤田　安子
八王子市　米沢　愛子
鴻巣市　木村　寿昭
八王子市　中田　律子
〃　櫻井　義弘
東村山市　福島　光子
八王子市　五味　三榮
相模原市　遠藤　恵子
練馬区　飯畑　正男
八王子市　落合　義晴
小平市　関　道雄
江東区　小宮　一雄
八王子市　峯尾　晴夫
中野区　塚田　昭然
川崎市　天沼　寛文
板橋区　㈱宍戸工務店
板橋区　一般社団法人全国人権擁護協議会
伊勢原市　佐々木　晋介
世田谷区　坂本　ルイ子
八王子市　神田　辰男
松本市　小林　幸平
八王子市　金子　喜美子
大田区　平林　弘明
八王子市　吉田　利江
中央区　冨澤　淑枝
西磐井郡　龍王寺
狛江市　熊澤　利久
新座市　彰山　粧麗
横浜市　大江　泰子
豊田市　山中　裕貴
八王子市　浅井　洋一
日野市　濱田　安代
八王子市　鈴木　良子
小平市　福王　茂雄
南アルプス市　三枝　秀武
八王子市　橋本　哲也
熊谷市　持田　光生
鴻巣市　杉山　邦司
杉並区　本堂　啓司
八王子市　高木　重義
立川市　五十嵐　孔亘
八王子市　舟見　正樹
相模原市　山﨑　宏行
桶川市　寺林　眞由美
荒川区　陣野　正樹
八王子市　小宮　昇
〃　黒須　隆一
町田市　坂口　安宏
世田谷区　善養寺　呈
八王子市　町田　三善
さいたま市　関根　節子
八王子市　江添　誠子
杉並区　田中　榮司
〃　山室
八王子市　松澤　洋三
目黒区　谷島　浩
八王子市　小野　幸弘
世田谷区　高橋　亨子
東大阪市　安宅　達利
足立区　杉山　幸雄
西東京市　下田　トミ子
新座市　高橋　久子
八王子市　柏木　多美子
小平市　関　道雄
相模原市　田中　ふみ子
富里市　森　照森
柏市　天野　久仁子
熊谷市　藤田　妙子
八王子市　梅川　交世
所沢市　北田　光一
船橋市　小渕　修二
武蔵村山市　川島　しず子
藤沢市　山上　晴美
甲府市　清水　慶子
八王子市　石田　貞夫
甲州市　植野　幸子
青梅市　須崎　敏雄
横浜市　古郡　一弘
八王子市　吉村　隆一
秩父市　上原　幸江
行田市　野口　琢磨
飯能市　大久保　育男
八王子市　梅沢　富士子
松戸市　榎本　光
伊勢崎市　渋沢　将光
御殿場市　芹澤　宗一郎
小千谷市　成　就院
さいたま市　水岡　健二
〃　原田　友光
東久留米市　但馬　憲
立川市　長谷川　修康
飯能市　細田　佐代子
八王子市　佐藤　光
三鷹市　三鷹明心講
八王子市　石田　博司
羽生市　鹿野　ツネ子
八王子市　川村　暁信
〃　小池　まり子
邑楽郡　今井　一惠
八王子市　笠原　清子
〃　村木　廣美
草津市　湯本　美和子
国分寺市　福田　宏
中央区　河田　静江
府中市　菊池　ヨシ
八王子市　齋藤　みゆき
小金井市　出佐　隆
立川市　石田　智恵子
前橋市　青木　茂雄
加須市　稲見　ツヤ子
銚子市　保立　和則
あきる野市　浜中　達久
市原市　小笠　真知子
日野市　岡田　志美子
大田区　金子　慎太朗
八王子市　金子　喜美子
郡山市　美濃部　良
高尾山健康登山者一同

登山だより

■三月行事日程■

一日～七日
聖天秘供(聖天堂)
十日、二十二日
弁天様御縁日
八日
仏舎利詣り(仏舎利塔)
二十一日
飯縄様御縁日
神徳報謝百味飯食供
(九時大本堂)
二十七日
月例写経会
(十三時山麓不動院)
二十八日
奥之院開扉供養
(十時奥之院)
高尾山とんとんむかし
「語り部の会」
(十二時半山麓不動院)

三月十四日
高尾山火渡り祭
午後一時
山麓祈祷殿大広場

※今後実施が予定されております、各諸行事につきましては、新型コロナウイルス感染症の流行状況によって、開催方法が変更される場合や、延期、中止を含めた対応となる場合があります。

毎日のお護摩奉修時間
(11月1日～4月14日まで)

午前6時00分
〃　9時30分
〃　11時00分

午後0時30分
〃　2時00分
〃　3時30分

ご講中・団体等御相談下さい。

慶賛会入会のすすめ

もともと仏教語で「慶賛」とは、仏教寺院、堂塔などの新築、修繕を祝賀する意味でありますが、**高尾山慶賛会**は、高尾山古来から伝承された年中行事を賛助し、御本尊・飯縄大権現様を尊信し、地域社会の親睦を図ることを目的としております。

高尾山は現在ミシュラン三ツ星を頂き、**『心のふるさと祈りのお山、世界に冠たる高尾の自然』**と称せられ、多くの参拝者が来られています。

ぜひとも茲に広く高尾山慶賛会員を募り、ご加入ご協賛を頂き、ご本尊様の威神力に浴されますよう祈念するものであります。

年会費　一口五千円

詳細は高尾山慶賛会事務局にご連絡下さい。
○四二-六六一-一一一五

侍衣装を着た慶賛会の皆様

お知らせ

二月に山麓不動院において開催が予定されております「月例写経会」や「とんとんむかし語り部の会」につきましては、一月に発出されました緊急事態宣言が今後延長された場合等、急遽中止とする場合も想定されますので、予めお問い合わせください。

また、新型コロナウイルスの感染予防を図る為、境内各所への消毒液設置・換気・職員のマスク着用などの対策を実施しております。御来山の皆さまにおかれましても、引き続き手洗いや咳エチケット等の予防対策情報に十分留意されますようお願い申し上げます。

高尾山薬王院ホームページ
http://www.takaosan.or.jp

発行所
東京都八王子市高尾町2177
大本山
高尾山薬王院
郵便番号　193-8686
電話(042)-661-1115㈹
FAX(042)-664-1199
発行人　菅谷秀文
編集人　渋谷秀芳
印刷　ヒラツカ印刷社
毎月1回1日発行
1部50円